

平成28年度 入学試験問題（第一回）

国語

注意事項

- ※ 問題は17ページまであります。
- ※ 試験時間は50分です。
- ※ 開始の合図があるまで開かないこと。
- ※ 答えは全て解答用紙に書くこと。
- ※ 句読点やカギカッコは一字と数えること。
- ※ ページが抜けていたり、印刷が見えにくかったりした場合には、手を挙げて知らせること。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

人間は、自分が生きている世界は「私が生まれた頃にはじまった」とつい思いがちです。①おじいちゃんやおばあちゃん、父さん、母さんに昔の話を聞く機会はあったとしても「ああ、そうなんだ、へー」くらいにしか思わないし、②真剣に想像しないでしよう。けれども、それでは人間世界の秘密を垣間見ることはできません。

一〇〇〇年、一〇〇〇年、一万年……③それくらいのスパンで何重にも過去をとらえないと、解決できないこと、選択を誤ってしまうことがたくさんあると思います。先ほど紹介した『野生哲学 アメリカ・インディアンに学ぶ』という本は、④ぼくが二〇年以上かけて書いたものですけれど、最も多くの人たちが敏感な反応を示した部分が「七世代の掟」という項目でした。

「七世代の掟」とは、アメリカの東海岸、今のニューヨーク州付近に住んでいたイロクオイ族というインディアンの人々の掟のことです。イロクオイ族は、会議を開くたびに「何事を取り決めるにしても、われわれの決定が以後の七世代に及ぼす影響をよく考えなくてはならない」と自分たちの義務を誓い合った④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿というのです。これは今のわれわれの時間感覚にとって、衝撃的ともいえる視点です。

たとえば、原子力発電所という問題を考えるとわかりやすいでしょう。二〇一一年三月十一日以降、われわれは原発に対して大きな不安を感じていますが、一九六〇年代に原発をつくった人たちとそれを受けつぐ人たちは「⑤」のひとことで、福島第一原発の事故を片づけようとなりました。しかし、これは⑤ではなく、⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿に想像力が不足していただけでしょう。一九六〇年代の日本は地震の静穏期だったので、その当時の状況だけでとらえていた。もしも一〇〇〇年の単位で物事を考えていれば、一〇〇〇年前には今回と同規模の地震が起きているのだから、いつでもまた発生することを想定できたはずですね。

一つの世代が二〇〇五年とすると、七世代とはだいたい一〇〇〇二〇〇年になるでしょうか。そのくらいのスパンで考えるならば、日本列島が元の地殻変動レベルに戻ったとき、人々にとても大きな危険を強いことになることは、当然想定できるはず。「想定外」だなんて、とても浅はかな考えでした。

20 ⑦しかし、その土地に根ざして、動物・植物とよく付き合いながら暮らしてきたイロクオイ族の人たちは、自分たちの社会の決まりごととして「七世代の掟」を考え、それを守っていた。これはひじょうに重要なことではないかと思えます。そして本当は世界中で、われわれはみんな、かつてはアメリカ・インディアンとおなじく「土地の人々」native people だったのです。

25 現在の地球上のすべての人類は、ホモ・サピエンス・サピエンスという種に属しています。人類はそもそもアフリカ大陸の東で誕生し、ヨーロッパ大陸を経てユーラシア大陸を旅行しながら拡散していきました。氷河期にはシベリアとアラスカの間がベ
⑧ーリンジアと呼ばれる細長い陸地になった。人類はここを通過して北アメリカ大陸に入っていき、瞬間に南アメリカ大陸の南端まで到達しました。こうして人類は地球と出会ったわけです。

なぜこんなことを説明するかというと、みんなには人間の歴史、つまり日本人とかフランス人の歴史という「国民国家」的な尺度ではなく、ヒトという「種」の文明と地球上への拡散という視点から考える癖をつけてほしいからです。現代のように世界が一体化してモノの流通や人の行き来が盛んになると、自分の生活や行為が思ってもみななかったところに結びついてゆきます。まるでかわりがないと考えている人たちの生活に、自分が直接的な影響を与える可能性があるということを見抜くには、人類の歴史から発想する姿勢を身につける必要があります。

35 さつき「土地の人々」という言葉をつかいました。アフリカからはじまった人々の暮らしは、地球上の各地でそれぞれの条件に適應するうちに、食べ物も身体の特徴も顔つきも皮膚の色も徐々に変わっていきました。しかし、共通していたのは「自分はこの土地で生きていくのだ」という気持ちです。⑨と⑩です。それがなければ、人類はどこでも生き延びることができなかつたでしょう。ぼくはある土地で暮らす「土地の人々」を定義するために、三つの所属のかたちを考えてみました。

まず一つめは「物質的」所属です。人間は「物質」としてある土地に所属する。土地で採れる植物や動物の肉を食べて、水を飲む。自分の身体をつくるものは、その土地が与えてくれるものでした。

二つめは「霊的」所属です。自分のお父さんやお母さん、おじいちゃん、おばあちゃんたちがその土地で生きて、最後は死んで土に還る。その土を踏みながら暮らしていくという感覚、つながりに対する意識のことです。

40 三つめが、ぼくがいちばん重要だと思っている「審美的」所属です。つまり人がその土地を「美しい」と思うこと。いろんなものを与えてくれて、自分の先祖が暮らしてきた土地。でもそれだけでなく、そこで暮らすことが「このうえなく幸せ」と心から思える。その感覚を「審美的」所属と呼んでみましょう。

この三つの感覚を併せ持っている人たちのことを、ぼくは「土地の人々」と呼びます。これはおそらく、つい最近まで世界中で生きていた感覚だと思います。それが崩れてきたのは産業革命後、この二〇〇年ほどのことでしょう。都市に住む人が増え、商品社会が発達し、人間はすべてを商品として購入するようになってきました。

ぼくが翻訳した『星の王子さま』という物語でも、「今は皆なんでもお店で買えるようになったから、友だちだってお店で買えるって思っている」というセリフが出てきます。でもこの感覚はまさに、一九世紀を迎えて都市が異常に発達し、肥大した後に出てきたものです。

《 中略 》

50 つい最近まで地球のどこでもみんなが土地に愛着を持って「その土地で生きていく」と考えていたのに、今は多くの人が都市で暮らしている。この都市への集中は、現在の経済システムがある限り元には戻らない。ここにいるみんなが、やがて会社に勤めて、そこでもらったお金で生きていくのが一番だと考える、そんなライフスタイルを根本から見直さない限り、この傾向は変わらないでしょう。

現在の社会が変わるための鍵を握るのは、農業、漁業、林業などの第一次産業ではないかと思えます。宮城県の気仙沼でカキ

55 を養殖している畠山重篤さんという人は、カキがうまく育たないのは川の上流で育てられた栄養分が海にこないからだと思つて、上流の森の植林活動を始めました。それによって大変に良質なカキが育つようになりました。これは一例ですが、そういったエコロジ¹²ー的意識(すべてがすべてに関係しているという意識)によって第一次産業が見直される時、希望が見えてくると思つます。

60 日本は、それでも西ヨーロッパに比べると都市化が遅かった。国内移住によって土地とのつながりを失いはじめたのも比較的最近です。日本では神社のそばに鎮守^{ちんじゆ}の森がまだ遺^ぞされているし、新宿からわずか二時間で行ける奥多摩にはツキノワグマさえ生息している。世界的に見ても野生のクマが首都のすぐそばに棲^すんでいるのは珍しい。そういう稀有^{けう}な環境が、日本にはまだ残されています。

環境だけではない。今まさに失われようとしているけれども、日本人は自然に対する感覚や、土地の聖性に対する感覚を比較的よく残してきました。そこに可能性を見出すことができるのかもしれませんが。

65

《 中略 》

先ほども話したけれど、ぼくらは自分たちが生まれた頃から突然世界が始まったと思いがちです。もちろんそれは無知による錯覚¹³です。石器時代から受け継がれてきた生活様式を守り、文明(＝都市化)社会とは関係のない独自の伝統的スタイルで暮らしてきた、各地の土地の人たちとその歴史に興味を持つことが、ぼくらの思い違いを正してくれるでしょう。

(菅啓次郎^{すがけいじろう}「アメリカ・インディアンは何を考えてきたか?」『考える方法(中学生からの大学講義)2』(ちくまプリマー新書)所収)より)

問1

①・②・③・⑦に入る言葉として最も適切なものを、次のア～オの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ア せめて

イ あまり

ウ もともと

エ だんだん

オ もちろん

問2 — 線部④「これは今のわれわれの時間感覚にとつて、衝撃的ともいえる視点です」とありますが、それはなぜですか。その

説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 今のわれわれは過去のことは十分に勉強し考えているが、未来に何が起こるかを想像することはできないため。

イ 今のわれわれは先祖に興味をもつことはあっても、それをもとに真剣に話し合い決定するということはしないため。

ウ 今のわれわれは自分のことは考えるが、人類すべてのことに関心を持ち、十分に考えるという視点に欠けているため。

エ 今のわれわれは自分の生きている時間のことしかよく考えておらず、長い歳月に意識を向けるということはないため。

問3

⑤ (二箇所あります)には、本文中にある言葉が入ります。その言葉を、二つ目の⑤より後の本文中から三字で抜き出しなさい。

問4

線部⑥「たんに想像力が不足していただけでしょう」とありますが、具体的にどのような想像力が不足していたのかを説明した次の文の空欄に入る言葉を、本文中から抜き出して答えなさい。ただし、Xには二十三字の言葉が、Yには十一字の言葉が、それぞれ入ります。

≪ X ≫という歴史的事実をふまえ、≪ Y ≫できる力。

問5

線部⑧「こうして人類は地球と出会ったわけです」とありますが、これをわかりやすく言いかえたものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 人類が移動し、他の大陸の人類と合流した。 イ 人類は、地球が丸いということを実感した。

ウ 人類は地球全体へと住む地域を広げていった。 エ 人類は地球上ならどこでも暮らせるようになった。

問6

⑨・⑩に入る言葉として最も適切なものを、次のア～オの中から二つ選び、その記号を答えなさい（解答の順序は問いません）。

ア 本音 イ 決意 ウ 安心 エ 空想 オ 愛着

問7

——線部⑪「今は皆なんでもお店で買えるようになったから、友だちだってお店で買えるって思っている」というセリフを用いることによる効果として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 今、お金によってものを手に入れることができるシステムがいかに当然のことになっているかを、極端な例を用いることによって印象づけている。

イ 現代の人々はものがあふれた生活をしているが、その生活は、お金で買えない友情と引きかえに手に入れたものであるということに気付かせている。

ウ 都市の発達によって異常に人口が増えた社会では、人やものに愛着を持って接することが減り、人々の間で様々な誤解も生じるという問題を指摘している。

エ 今の生活は非常に便利で快適になったのに、人々はさらに努力をせず何でも手に入れることができるシステムを作る方向に向かってしていると警告している。

問8

——線部⑫「エコロジー的意識(すべてがすべてに関係しているという意識)」とありますが、ここでは具体的にどのような行為とどのような出来事との関係を挙げていますか。本文中の言葉を用いて、それぞれ十字以上十五字以内で答えなさい。

問9

——線部⑬「錯覚」とほぼ同じ意味の言葉を、同じ段落の中から一語で探し、抜き出しなさい。

問10 本文全体をふまえて、「土地の人々」に関する筆者の考えとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 都市と自然が入り混じる珍しい環境が多く残されている日本は、西ヨーロッパに先がけて、土地とのつながりを取り戻すことができると思される。

イ どんな土地にも愛着を持つて暮らしてきた昔の時代のことをよく学び、その生活に戻ろうと努力することが、われわれが生き延びるために必要である。

ウ 「その土地で生きていく」という感覚を持ち続けている人々の生活や歴史に目を向けたその先に、今のわれわれがより良い社会を築くためのヒントがある。

エ その土地を「美しい」とさえ思うことができれば、おのずからその環境に適応し、過去の歴史には見られない独自のスタイルで生きる有能な人々になることができる。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

松本嘉穂は中学二年生。おじいちゃん、おばあちゃん、おばちゃん（お父さんの妹）、弟の穂高と暮らしている。お母さんはずでに亡くなり、お父さんは嘉穂たちとは遠く離れて生活している。時に込み上げてくる複雑な感情も表には出さず、できるだけ家族に迷惑をかけないようにと毎日を過ごしている嘉穂が唯一夢中になれるものが、歌である。そんな嘉穂の歌声を評価してくれた後藤先生（クラスメイトの後藤未佑人の母）のもとで、嘉穂は声楽のレッスンを受け始めた。親友の菊池ひとみも音楽に興味があり、同じく後藤先生にピアノを習っている。

秋になり、合唱コンクールのクラス練習で音楽室に来ていた時、後藤未佑人が突然ピアノの前に座り、今嘉穂が練習中の歌曲を弾きはじめた。その演奏の美しさに魅了され、嘉穂は思わず歌い出した。途端にクラス全体が静まり返り、嘉穂の歌声に聴き入ってしまった。

音楽室での練習のあと、嘉穂とひとみと後藤が村上先生に呼びだされた。

「ねえ、歌ってまない」

（なんのこと？）

5 「今度の合唱コンね、地元の有力者なんかが来るのよ。音楽室の楽器や、ピアノなんか知ってるでしょ？ 特に古くて、すぐに音が狂うのよ。寄付してくれないかななんて、あたし、下心があるのよ」^①

そんなこと、嘉穂には関係ないだろうと思うのに、村上先生は熱弁をふるう。^②

「合唱コンでさあ、松本さん、歌ってよ。こんな才能のある子がわが校にいるんですよって、あたし、見せつけたいのよ」

「才能なんて、あたし、無いです」

嘉穂は言い返したが、完全に無視された。

10 「そんなことないわよ。素晴らしいわ。そんな才能の持ち主を指導しているわたしの株もあげたい」^③

（それは先生の勝手でしょ。大人の思惑にまきこまれたくはない）

嘉穂は村上先生にいちいち反発した。どうせ、後藤もひとみも嘉穂の味方だ。こんな自分勝手な先生のもうしでを受けたりはしないだろう。

15 「後藤君はピアノ担当で、菊池さんは譜面めくり、ねえ、松本さん、歌ってよ」

「いやです」

嘉穂にしてはきつぱりと断りの返事ができた。これはひどくめずらしい。いつも波風を立てないことを大切にしてきていた嘉穂だ。でもこれだけは譲れないとばかりに言いきった。

「あたし、そんなに上手じゃないし、人前で歌うなんてとんでもないです」

「大丈夫よ」

20 とどこに根拠があるのかわからないのに、村上先生がねちっこく説得しはじめる。

「嫌なものは、イヤです」

「そうだよな」

黙って横に突っ立っていた後藤がつぶやいた。

（④）

25 嘉穂はちよつとほっとした。

「こいつ、人前で歌えるほどうまくない」

おじいちゃんが庭木を切る時も、こんな風にスパツとは切らないと思えるほど、切つて捨てられた。

ひとみが目を見開いて後藤を見、嘉穂の様子をうかがっている。

⑤ 嘉穂の心が沸騰した。

（ ⑥ ）

顔が熱くなってくる。

「声もでていないし、音程も微妙に狂う。下手。一言ですよ」

この言葉で、（注1）キャンのノミを探すとき以上に、髪の毛が逆立った。

「う、歌えるわよ。下手つて、なによ」

35 「そうよね。大丈夫、わたしが保証するから」

村上先生の言葉なんか耳にはいらぬ。

嘉穂は後藤に向きあつて、あやうくなぐりかかろうとした。歌うのが下手なのはよくわかっている。でもそんな風に残酷に言わなくなつていいじゃないか。後藤の心根が絶対許せないことのように嘉穂には思えた。

⑦ 後藤の顔が笑つていた。

40 「ほれ、歌うことになつたようだぜ。おまえ、単純」

え？

嘉穂は慌てた。

今、嘉穂が頭から煙をあげるように怒りまくっているのは、歌うとか歌わないとかということとは違つて、残酷な言葉を平気で言う後藤に対してだ。なのに話は違う方向へとそれ、そして決まっていた。

45 「いえ、歌いません。そうじゃなくて」

完全に勢いをなくした嘉穂の言葉に、じゃ、どうなんだと後藤のくちびるが動く。

「大丈夫よ。あれだけ声のでるって、中学生ではめずらしいんだから。それに後藤君のピアノも素晴らしいし……」

⑧、と心の中で思いながら、嘉穂はへとへとになっていた。荒立ち、沸騰する⑨ような心をおさえるのに、慣れているはずなのに、後藤が相手だと調子が狂った。

50 「嘉穂、歌つてよ。あたし、嘉穂の歌、好きだよ」

ひとみ、お前もか、と嘉穂の心はがっくりと折れた。最後の頼みの綱だったひとみまで嘉穂の希望⑩と別の事を言いだしている。

⑪

と嘉穂はしみじみと思った。

55 「じゃ、歌うのは、さっきの歌ということぞ。もしかして、松本さんの先生って、あの後藤先生なの？」
力なくうなづく。

「じゃ、あたしからもよく頼んでおくから」

「そんなことしないでいいです」

嘉穂は気持ちを落ちこませてそうつぶやいた。

「じゃ、そういうことで……」

60 どういうことなんだろうと、混乱した頭を振りながら先生の顔を見あげたとたん、ひとみに抱きつかれた。

「キヤー。すご。おもしろそ」

ひとみには他人事なんだ。おもしろくなんかない。絶対に顔なんか見ないと思っていた後藤が笑いをふくんだ声で言う。

「とちんなよ」

むっとして、顔をあげた。その時にはもう、後藤は後ろ姿だけを見せて廊下を歩いていった。

65 大変なことになってしまった。

どうしよう。

歌うしかないのか。

だれか、助けてよ。歌いたくなんかないよ。

先生に一札をして、ひとみと連れだって歩きだした。

70 「ね、ね、後藤先生って、すごいんだね。だって、村上先生が、後藤先生って言った時の表情、見た？ 尊敬っていう顔だったよ」

そんなことはどうでもいい。

後藤のばかやろう。

立ち去っていく後藤の背中にシューズを投げつけたかった。

75

嘉穂はこの一件を秘密にしたかった。おばちゃんにもだれにも話さないと決めていた。でも、それは無理だった。^⑫
夕食のとき、

「嘉穂、合唱コンの時、ソロで歌うんですって」

とおばちゃんに言われた。

80

^⑬ 嘉穂は箸を落とした。

全員の視線が集まった。

ひとみママはおばちゃんの友達だったなんてすっかり忘れていた。ひとみには口止めしたけれど、ひとみママにまで思いがいかなかった。

85

たいしたことじゃないと思っっている穂高は「へえ」と、言ったきりで、目の前にある大好物のエビフライにかぶりついている。

「大丈夫なの？」

心配そうに続く。

「そんなたいそうな所で歌わなくなたって……。嘉穂ちゃんが、歌が好きならそれで十分だよ。好きに習って歌ってればいいんだから。たまに、おばあちゃんの前で歌ってくれると嬉しいけどね」

おばあちゃんが優しく言う。

90

「いやなら、あたし、学校にかけあつてあげるよ」

そうか、それもありか、と嘉穂はおばあちゃんの顔を見た。一縷の望みはおばあちゃんかなと思いかけたとき、おじいちゃんの声がした。

「あいつのせいだな。高嘉のせいだ」

お父さんのことだ。

95

「注^② あいつがコンサートなんか連れていくから、嘉穂が真似したいなんて思うんだよ」

見当違いもはなはだしい。

「お父さん、止めなさいよ。嘉穂の前でお兄ちゃんを悪く言うのは」

「だって、そうだろう」

「そうじゃないってば」

100

おばあちゃんがくつつかかるようにおじいちゃんの言葉を止めようとする。

「あたし、歌うから」

嘉穂の口から捨てゼリフのようにでた言葉。お父さんは関係ない。カチンときた。

⑭ (あたしはあたしで歌う)

と、その時嘉穂は覚悟を決めた。

(にしがきようこ『ピアチエーレ 風の歌声』(小峰書店)より)

注 1 キャン——嘉穂の家の飼い犬の名前。

2 あいつがコンサートなんか連れていくから——以前に、嘉穂はお父さんに誘われ、二人でNHKホールへ歌のコンサートを聴きに行った。

問1 ——線部①「下心」とほぼ同じ意味を表わす言葉を、ここより後の本文中から二字で抜き出しなさい。

問2 ——線部②「熱弁をふるう」・③「株をあげる」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

② 熱弁をふるう

ア 情熱的に指導する

イ 熱意を持って誘う

ウ 熱狂的に味方をする

エ 熱心な口ぶりで話す

③ 株をあげる

ア 弟子を増やす

イ 給料を多くする

ウ 評価を高くする

エ 能力を向上させる

問3 ④・⑥・⑧・⑪に入る言葉として最も適切なものを次のア～オの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ア あたしは一人だ

イ あたしには歌しかないんだから

ウ だから歌わないって言ってるでしょ

エ ほら、味方があたしにはいるんだから

オ なんだ、その言い草は。味方をしてくれるのなら、もっと他の言い方があるだろう

問4 ——— 線部⑤「嘉穂の心が沸騰した」とありますが、この時の嘉穂の気持ちとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ

選び、その記号を答えなさい。

ア 歌が下手だというのは分かっているながら、どうすることもできない自分自身へのいら立ち。

イ 相手を気遣って言葉を選ぶことをせず、ひどい言葉を平然と投げつける後藤に対しての怒り。

ウ 自分の歌の才能の方が劣っているように聞こえるのは、後藤の上手な伴奏のせいだと思ふ悔しさ。

エ 歌の能力について自分でも気にしていたことを、後藤にも指摘されてしまったことによる失望感。

問5 ——— 線部⑦「後藤の顔が笑っていた」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最も適切なものを次のア～エの中から

一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 嘉穂が小さな問題に対して必死になって怒るのがおかしかったから。

イ 嘉穂をうまく誘導し、歌うという返事をさせることに成功したから。

ウ 嘉穂が歌おうか迷い、心が揺れている様子がほほえましかったから。

エ 嘉穂の伴奏者として自分が認められ、舞台に立てると決まったから。

問6 ——— 線部⑨「荒立ち、沸騰するような心をおさえるのには、慣れている」とありますが、これと似たような嘉穂の人柄を表わ

している一文を、ここより前の本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問7 — 線部⑩「嘉穂の希望」とありますが、嘉穂はひとみにどのようなことを期待していたと考えられますか。二十一字以上三十字以内で具体的に説明しなさい。

問8 — 線部⑫「でも、それは無理だった」とありますが、嘉穂が歌うということはどのような流れで伝わったのか、説明しなさい。

問9 — 線部⑬「嘉穂は箸を落とした」とありますが、この時の嘉穂の気持ちを表わした言葉として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 落胆 イ 興奮 ウ 後悔 エ 驚き オ 諦め

問10 — 線部⑭「あたしはあたしで歌う」と、その時嘉穂は覚悟を決めた」とありますが、嘉穂がこのような思いに至った説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 歌うことが家族に知られてしまったことは許せないが、家族には思いのほか心配されていることがわかった。そしてこれ以上心配をかけないように堂々と歌わなくてはならないと気づいた。

イ 歌が下手なのは自分自身でよく分かっているが、好きなことは確かだ。だから他人が何と言おうと、その評価を気にせずに歌うことに挑戦し、努力していつかうまくなってみせようと考えた。

ウ 歌うかどうかの問題は、周囲の人にとっては他人事であり、自分の心の内を理解してもらうことは期待できない。もう歌うと決まってしまった以上、自分なりにやってみるしかないと思った。

エ 家族は自分の気持ちを様々に想像しているが、自分が歌うかどうかという問題と、家族関係の悩みとは結びつけてほしくない。自分はそのようなしがらみを気にせずに、楽しく歌おうと決意した。

三

あとの問いに答えなさい。

問1

次の①～⑤の文の——線部のカタカナを適切な漢字に改めなさい。

- ① 面接では志望ドウキを尋ねられる。 ② 怪我のため試合出場をダンネンした。
- ③ この事故により三十人がフシヨウした。 ④ 五輪スタジアムのケンセツ費を見積もる。
- ⑤ 優秀なプログラマーとしてトウカクを現す。

問2

次の①～③の空欄には、——線部の言葉と反対の意味の言葉が入ります。その言葉を、それぞれ漢字二字で答えなさい。

- ① は成功のもと。 ② 収入額から額を差し引く。 ③ の画家が、一気に有名になった。

問3

次の①～④は、ある四字熟語の読みです。この四字熟語の意味として最も適切なものを、後のア～オの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① ふわらいどう ② だいどうしようい ③ じゅうにんというろ ④ しんしようぼうだい
- ア 物事をおおげさないうこと。
イ 長所もあるが、短所もあること。
ウ 好みや考えは人によってそれぞれ違うこと。
エ 大体は同じだが、小部分だけが異なっていること。
オ 自分に決まった考えがなく、わけもなく他人の説に賛成すること。

